

あるむぜお87

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 87

2009年3月20日



笹寺石柱と平右衛門定孝の墓碑

目次

- 1-2 シリーズ川崎平右衛門定孝の墓めぐり
 - ④新宿区四谷 長善寺(笹寺)
- 3 展示会案内
 - 特別展 武蔵府中と鎌倉街道
- 4-5 ノート 武蔵野を行く西行
- 6 新米学芸員の交換日記
- 7 最近の発掘調査
 - 饗宴の場？鎌倉時代の敷石を発見
- 8 展示室リニューアルトピックス ⑫

川崎平右衛門定孝の墓めぐり

④新宿区四谷 長善寺(笹寺)

四谷から新宿に向かって新宿通りを歩き、四谷三丁目の交差点を過ぎ、そろそろ四谷大木戸跡も近いなというあたりで、左側に「四谷山 笹寺」と彫った石柱が目につきます。いわゆる大門と称する短い参道を通して境内へ入り、本堂を廻り込むと墓地になっています。

都会の真ん中の墓地は、その一角だけ空が低くなったような、異質な世界に迷い込んだような、少し不思議な感覚を覚えます。

中心部より少し手前にある川崎家の墓域は、さほど大きなものではありません。ここは、平右衛門定孝が押立村の百姓から幕臣になって後、旗本としての川崎家が墓所としたところですが、どの代からそうなったかは調査されていません。

平右衛門定孝について足で書いたといっても過言でない、渡辺紀彦氏の『代官川崎平右衛門の事績』(1988年 つばさ企画)には、昭和46年(1971)3月に、川崎家の末裔であった鑄子氏がこの墓域について語ったことが載っています。

それによると、もとは12基ほど墓石のある広くて鬱蒼とした墓域でしたが、寺から再三にわたり割譲の要請があったので、日当たりの良い南向きにして狭め、3基だけ残したそうです。そして、

比較的古い遺骨は平右衛門(定孝)の墓に納め、それ以外は他の2基に入れたとも語られています。

確かに現在の墓域には3基しか墓石はなく、広くはありませんが、すぐ近くに歴代住職の無縫塔が並ぶ一郭があるのを見ると、このあたりが墓地の中心部

でいわゆる良い場所なのだと思います。

その残された3基の左は台座が崩れていますが、最後の旗本川崎氏として幕末を迎えた孝達夫妻、真中は正面に鑄子氏の両親、左側面に鑄子夫妻の法名がそれぞれ彫ってあります。墓域の整理で新たな墓石を置く面積がなく、一緒に葬られたのでしょう。この2基は大きさも形もよく似ています。

右側のが、形は同じですが少し大きい「霊松院殿忠山道栄居士」と「養壽院殿義山智孝大姉」、つまり平右衛門定孝夫妻の墓石です。定孝の墓や供養塔は何か所もありますが、夫婦一緒なのはここだけです。法名の「居士」に「大」は付いてい



笹寺の川崎家墓所。向かって右が定孝の墓碑。

ません。右側面には二人の命日と定盈の両親であること、左側面には大正7年(1918)の従五位追贈のことが彫られています。

しかし、命日の下の「定盈父藤原孝定」はどうしたことでしょうか。うっかり間違えたとしたら、定孝についてよく知らない人たちに

よって、おそらく彼の死から随分経ってからこの墓が造られたのだらうと推測されます。

4回に亘って巡ってきた平右衛門定孝の墓所ですが、過密な感もある都会の墓地のせいでしょうか、代官、旗本としての直系家のこの墓所で最も彼の存在が希薄な気がしました。江戸には確かに屋敷もありましたが、彼が懸命に仕事をし、情熱を傾けたのは武蔵野であり、美濃であり、石見であったのだと思うと、その熱がここには届いていないように思えたのです。でも彼にとっては、旗本川崎家の初代として、血縁の方たちから夫妻が一つの墓で供養を受けているところが、一番穏やかな眠りの場所なのかも知れません。(馬場治子)

展示会案内

府中の歴史といえば、《武蔵国府》と《甲州街道府中宿》が真っ先に頭に浮かびます。府中は、古代において武蔵国の国府となったことで、地方都市としての道を歩みはじめました。そして、江戸時代に甲州街道の宿場となったことで、今日の町原形が形作られました。府中の歴史にとって、《武蔵国府》と《甲州街道府中宿》は大変大きな意味を持っているのです。

しかし、《武蔵国府》と《甲州街道府中宿》の時代に挟まれた中世という時代も、けっして見逃すことのできない歴史を紡いできました。今回の特別展では、府中の歴史のなかでは取り上げられることの少なかった、こうした時代にスポットをあてます。

タイトルのとおり、展示の骨格となるのは《武蔵府中》と《鎌倉街道》です。

中世府中の実態については、これまで古文書や古記録、仏像といった工芸品などから、考察されてきました。しかし、市内の発掘調査が進むにつれ、中世の遺跡の存在も明らかになり、考古学的に中世府中の空間を復元する手掛かりも得られています。

いっぽう、中世の府中を考えると、重要な位置を占めるのが、府中を縦走する鎌倉街道上道です。この鎌倉街道上道については「いざ鎌倉へ」という言葉が示すように、また新田義貞による鎌倉幕府功略にいたる進軍ルートであったことに示されるように、軍事的な性格の強い道と評価されがちです。しかし、鎌倉街道上道は、鎌倉から各地へ、各地から鎌倉へと、軍勢ばかりでなくさまざまな物資、そして情報が行き交う幹線道でもありました。

今展示会では、この鎌倉街道上道を軸にして、古文書と美術工芸品、そして近年蓄積されてきた発掘調査による出土品を加えて、中世の社会を考えます。武蔵府中の様相を復元し、そのうえで鎌倉街道沿道の風景や機能を探ります。展示を通して〈歴史の道を歩く〉試みであり、実際に古道を歩く誘いになればと思います。(深澤靖幸)

特別展 歴史の道を歩く

武蔵府中 と 鎌倉街道

2009 / 4 / 25 日 - 6 / 21 日

開館時間 ◇ 9:00～17:00 (入場は16:00まで)

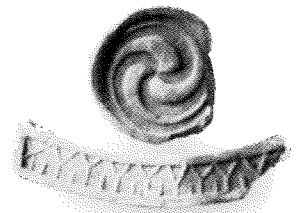
休館日 ◇ 4/27 (月)、5/7 (木)、11・18・25 (月)、26 (火)、6/1・8・15 (月)

会場 ◇ 本館1階特別展示室

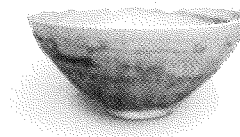
観覧料 ◇ 大人500円 中学生以下100円 (博物館入場料として)



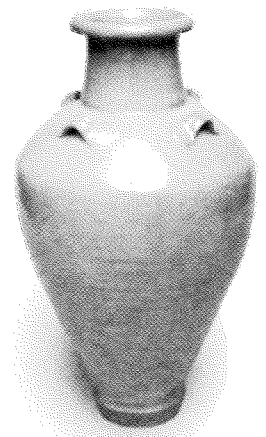
埼玉県寄居町三嶋神社鴨口
(埼玉県指定文化財)
三嶋神社蔵 林宏一氏写真提供



府中市大國魂神社出土瓦
府中市教育委員会蔵

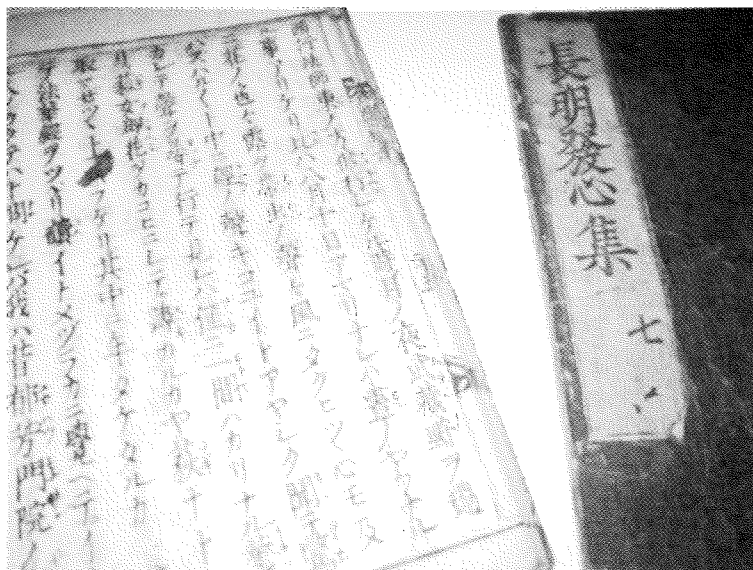


鎌倉市衣張山出土青磁碗 (重要文化財)
東京国立博物館蔵・写真提供



東松山市光福寺出土白磁四耳壺
(埼玉県指定文化財)
光福寺蔵 東松山市教育委員会写真提供

武蔵野をゆく西行



長明発心集（本館所蔵）

「西行橋」の伝説

あの有名な西行がここまで来て引き返したという伝説の場所は、なかなか見つかりませんでした。よく晴れた冬のある日、埼玉県比企郡ときがわ町の桃木八幡神社までは来たのですが、町の文化財ガイドブック等に記載はなく、現地の標識類も見当たらず、さて困ったというところで、畑で枯枝か何かを燃やす煙が上がっているのが目に入り、そこで作業中の年輩の女性に聞いてみることにしました。

「このあたりに西行橋というのがあって聞いて伺ったのですが…」「西行橋だったら、神社の鳥居の前の道を右に行き、坂を下りたところの小さな橋のことですよ。」「おかし西行さんがここまで来たのですか？」「えー、そこから引き返して行ってしまったんだそうです。一緒にいたもう一人の女性も頷いて見せました。

さて、この「西行橋」の伝説は次のようなものです。慈光寺に向かっていた西行はここで小僧と出会う。山でドウドウ響くのは何かと尋ねると、小僧は寺で朝粥を煮る音だと答える。さらにどこへ行くのかと西行は問うと、小僧は「冬ほきて夏枯草を刈り（麦刈り）にゆく」と答えるが、西行にはその謎かけがわからず困って引き返したのが、この橋のあたりだと言うのです。

この話は、昭和の初めに地元の人によって紹介され、民俗学者柳田国男が注目し、全国に散在する「西行戻り橋」「西行戻り松」「西行戻り石」などと共通する伝説の一つとして知られるようになりました。



西行橋

「武蔵野」の西行物語

平安時代末期に全国を旅しながら、たくさんの名歌を遺したのが西行です。鎌倉時代中頃に作られた伝記物語に『西行物語』があります。そのなかで、東海道を東に下り陸奥へ足を伸ばす途中のこととして、次のような「武蔵野」での出来事が描かれています。

武蔵野の月と薄すすきがあまりに美しく、宿も忘れて歩き続ける西行。すると道から奥に入ったところで法華経ほっけきょうを読む声が聞こえる。その庵を探し当てた西行は、おかし都で侍の長だったが、仕えていた女院の死を契機に諸国を回り、ついに武蔵野を終生の修行の場としたという隠者に出会い、大いに心を寄せた、というのです。

ただ、歌僧の旅らしく著名な歌枕を次々と訪ねる『西行物語』の構成のなかで、月と薄をキーワードとする「武蔵野」の情景に彩られたこの話の真実味は、少ないように感じられます。



西行橋周辺の風景

鎌倉街道と慈光寺

一方の「西行橋」の伝説についても、川や橋や寺の入口などの境界の場所で、余所からの来訪者がその土地の神と問答の末に敗れ、退散するといった民俗観念から来る類型的なモチーフが見られるとされています。本当に西行がここに来たとは考えられません。

両者ともフィクションである可能性は高いのですが、もし西行が歩いて来たルートが鎌倉街道だとすれば、地理的な口ケーションが似ていることに注目できます。

鎌倉街道の本道（上道）は嵐山町大蔵・菅谷を通っていることが知られているので、そこから西の方角の慈光寺へ向かうには、途中で木曾義仲ゆかりの古社・鎌形八幡神社を通る道筋が考えられます。「西行橋」はその中間地点にあたります。慈光寺は、奈良時代の創建伝承を持ち、中世に栄えた武蔵国では有力な天台寺院です。

『西行物語』では、「道より五六町」「わづかなる庵」と矮小化されていますが、武蔵野をゆく

街道とこの寺との位置関係は似ています。しかも、西行が庵で見たのは「絵像の普賢」と「法華八軸」、慈光寺には鎌倉時代初頭の法華経一品経ほっけきょう 29巻と観普賢経くわんぷげんきょう 1巻が伝来しています（いずれも国宝）。西行を受け入れたか拒んだかの違いはありますが、もしかして、慈光寺がモデルになって、『西行物語』の話が作られたということは考えられないでしょうか。

鴨長明をめぐるつながり

そんな可能性を残してくれるのが、『方丈記』の作者として有名な鴨長明鴨のちやうめいをめぐる交友関係です。『西行物語』に載る武蔵野の物語を最初に紹介したのは、長明が建保2年（1214）頃まとめたとされる仏教説話集『発心集』です。長明は西行の存命中から彼を慕い、文治2年（1186）には陸奥に旅立った後の西行の伊勢の草庵跡を訪ねて、歌会を開いています。『発心集』にはもう一つ、西行の出家に因む話も載せています。

一方、長明は、中央の有力な貴族・九条家とも関わりがあり、九条兼実くじょうかねねみの家司・藤原長親ふじわらながちかとは同じ出家の仲間でした。建仁元年（1201）に後鳥羽上皇ごとうほうこうは和歌所わかどころを設け、兼実の子・良経よしのりを寄人に任じますが、長明もこれに加えられます。九条家と鴨長明、ともに上皇の格別の庇護のもと、故西行を慕うという歌のサロンが生まれました。

元久元年（1204）に長明は隠遁生活に入りますが、その直後の建永元年（1206）、九条良経は38歳の若さで急逝きゅうせい。実は、その良経の供養のために九条家が中心になって制作したのが、慈光寺の法華一品経なのです。九条家と鎌倉幕府との密接な関係から、幕府や武蔵国衙と関係深いこの寺に納められたとされています。

九条良経の絶唱の名歌に「ゆく末は空もひとつの武蔵野に 草の原より出づる月影」があります。その良経の死の8年後に、長明は『発心集』をまとめ、西行の武蔵野の物語を採録するに至ったのです。

鴨長明を介して、九条良経から慈光寺へと関係はつながりました。一方、長明から西行を通して武蔵野の隠者の物語に及びました。その先、鎌倉街道をたどって「西行橋」のところで、両方の道がつながるかどうかが、それは、武蔵野の草原が深すぎて、定かではありません。



from Hana to Tom

新米学芸員の

交換日記

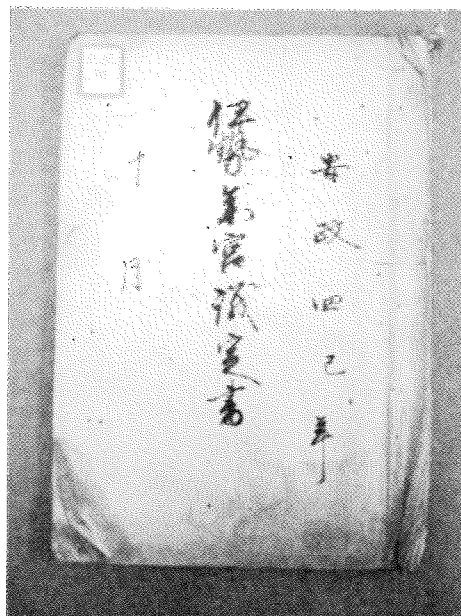
④「講」のこと

Tomさんへ。早いもので今年度ももうすぐ終りですね。今回は、Tomさんから念仏講ねんぶつこうの話を通して、村の助け合いの組織についてうかがいました。そのなかで、人見村の「歩射講（ビシャコウ）」について手がかりになる史料はないかという質問をうけました。

『府中市史』の下巻には、人見村うぶすながみの産土神である稻荷社に「ビシャ山」というのがあったから、昔は歩射がおこなわれていたのだらうと記されていますね。

人見に残る史料は、昨年度「府中市内家分け古文書目録11」として刊行した「人見 河内武家文書目録 河内辰夫家文書目録 河内貞子家文書目録」に掲載しています。また、このほかにも1家の寄託史料がありますが、私が見た限りでは歩射講についての記述はありません。今後、発見される可能性はありますが、現在のところ江戸時代に弓を射る神事が行われていたかどうか明言はできません。

ご存じのように、講は当初は仏典ぶつてんを研究する僧たちの集会でした。これが仏教を民間に布教するようになると民間の信仰上の団体にも「講」という名称が用いられるようになりました。その結果、現世利益げんせいりやくの側面が強くなり、経済的な相互扶助を目的とした頼母子講、遠隔地とんかくちへの参詣を目的とした「伊勢講」や「榛名講」、職人の同業者仲間の「太子講」「山神講」など、「講」は多元化し



伊勢参宮議定書（「番場神戸 高橋仁左衛門家文書」）

ていきました。

府中市内に残る「講」関連の史料は、「頼母子講」に関するものが一番多く、「伊勢講」や「大山講」などの参詣講に関する史料もあります。

「頼母子講」は講の構成員から定期的に掛け金を集め、構成員に貸し出すもので、借用者は元利金を返済することになっていました。もともと相互救済を目的として組織されたものですが、事業資金調達的手段に利用されることもありました。

府中市に残る史料は、掛け金の受取や借用に関するものがほとんどですが、「置穀頼母子講連名帳」という史料もあり、穀物を積み立てていた頼母子講もあったことがわかります。

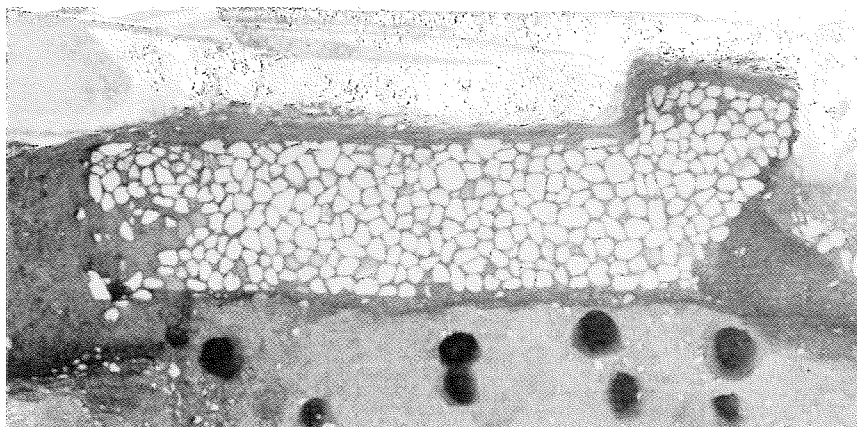
また、伊勢講では「番場神戸 高橋仁左衛門家」に安政5年（1858）の伊勢講による伊勢参宮の詳細な日記があります。また、前年の議定書には積立金に関することや旅行中の心得等が記されています。他の国の訛りみまげを嘲ってはいけなとか、神社仏閣に落書きや張り紙をしてはいけななど、興味深いことが記されています。

このほかにも諸堂再建のための講や巳待講みまちこうなどに関する史料があります。講は民衆の生活と密接に結びついているものなので、今度Tomさんから詳しい話をお聞きしたいです。

ここまで書いて、紙面も尽きてしまいました。来年度もTomさんとの交換日記が続くようでしたら、またいろいろ教えてください。 (Hana)

饗宴の場？ 鎌倉時代の敷石を発見

府中市遺跡調査会 中條 寛



敷石遺構（右が北）

今回は JR 府中本町駅の西方の現場から、中世の珍しい敷石遺構が発見されましたので紹介します。その場所は、「あるむせお 83 号」でお話ししました古代の「国司の館」と運河のような大溝が発見された場所の東側に当たります。

敷石遺構は、拳から手のひらほどの大きさの石が 388 個敷き詰められたものです。発見されたのは全体の東端にあたる部分とみられ、東西約 1.8 m、南北約 4.2 m の範囲に広がっていました。残念なことに北側を別な遺構に壊され、西側は調査区外へとおよんでいたため、全貌を把握する事ができませんでしたが、見つかっている東西ラインと南北ラインが、ほぼ直角に曲がっている事から、この敷石遺構は方形だと考えられます。

石の表面は若干の傾斜はあるものの、ほぼ平坦に敷き詰められ、敷石の周りには幅約 20 cm、深さ約 30 ~ 40 cm の溝が掘られていました。溝には板などの土留め材が立てられていた可能性があり、敷石の周囲は板で囲まれていたものと思われます。

この敷石遺構と周辺からは、中世の代表的な土器であるかわらけ（土師質土器）が多量にみつけられました。近隣の調査では推定で 500 個を超えるかわらけが出土している事から、この一帯では、大量のかわらけを使用する何らかの施設が存在していたこととなります。かわらけはその特徴から 12 ~ 13 世紀頃、つまり鎌倉時代のものと考えられます。

今のところ、この敷石遺構が何の目的で作られたものかは不明です。ただし、現在でも敷石は庭園などに見られる事が多く、この敷石遺構もその一部の可能性があります。また、府中でこれだけ多量の土師質土器が出土している場所は他になく、この付近一帯は何らかの饗宴が行われるような特別な場所であったようです。

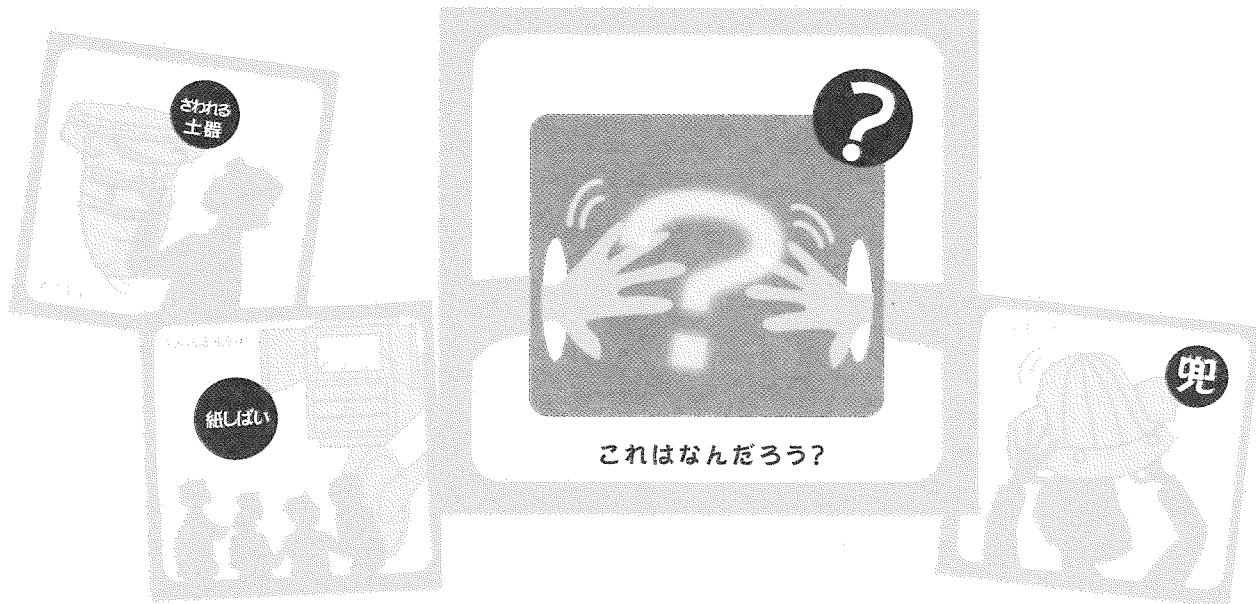
こうした特殊な場所を考える上で、ここに古代の「国司の館」があった事は見すごせません。中世になっても、この場所には国府に関係する人物が住み、饗宴が行われていたのかもしれませんが。中世府中の姿は、まだ多くの謎をふくんだままです。今後の周辺地区の調査が期待されます。



短刀と鉄鏃

敷石遺構の東約 7 m の柱列からは 2 本の短刀が、ピットからは雁股鏃が見つかりました。祭祀に使用されたのでしょうか。

⑫ 「こども歴史街道」「体験ステーション」いよいよ OPEN



3月25日、展示リニューアル事業の第2弾として、「こども歴史街道」と「体験ステーション」という2つのコーナーが新たにオープンします。2つのコーナーのコンセプトはすでにお伝えしていますが、手短かにいえば、〈みて〉〈ふれて〉〈きいて〉そして〈かんがえる〉、そんな子どもたちのためのスペースです。

しかし、この展示コーナーは、子どもたちばかりを対象にしているわけではありません。すべての世代が楽しめる、そんなコーナーを理想としてきました。

そもそも、〈みて〉〈ふれて〉〈きいて〉はおとなにも楽しいもの。おとなも遠慮せず、楽しんでもらえたら、と思います。そして、〈みて〉〈ふれて〉〈きいて〉そして〈かんがえる〉展示では、さまざまな障害にも気を配りました。なかでも〈ふれて〉は、あまり博物館を訪れることのなかった視覚障害者にも、博物館を利用してほしいという願いがあります。おとなにはちょっと低く感じるかもしれませんが、「こども歴史街道」や「体験ステーション」に設けたテーブルの下は、車いすが入り込める空間を確

保しています。解説パネルでは、色覚^{しょうがい}障害を考慮し、色のみで識別するような表示はなくなりました。まだまだ不十分かもしれませんが、展示のバリアフリーに向けての試みです。

このバリアフリーという視点を含めて、数あるアイテムのなかでの一押しは、「これは何かな」と題した箱です。中を見ることのできない箱のなかに手を入れて、出土品（模造）に触れてみようというアイテムです。一目見ればわかるものを、あえて視覚に頼らず、触って、考えるのがねらいです。何気なく見ていたものも、本気で触ると（観察すると）、これまで見てこなかったことに気付くもの。実際に展示室で触って（観察して）みてください。

さて、こんな「こども歴史街道」と「体験ステーション」がいよいよオープンするわけですが、スペースができておしまいでありません。このスペースをどのように活用し、運営するかが課題です。児童・生徒・先生をはじめとする利用者との試行錯誤^{しこうさくご}のはじまりです。どうぞ皆さん、ご協力をお願いします。そして、忌憚^{たん}のないご批判をお寄せ下さい。